

I 稲作重点指導事項

売れる近江米づくりを実践し、近江米の産地としてのブランド力を高めていくため、「温暖化等気象変動に影響されない安定した品質」と「環境にこだわって生産した安全・安心」の確保を目指した稲作を推進する。

このため、地域の条件に応じた品種の作付けを基本にして、以下の項目を重点に、近江米の生産の安定化・品質向上および環境こだわり農業の推進を図る。

1 品質向上に向けた重点技術対策の実践

高温条件下でも玄米の充実を良くするために、過剰な籾数を防止しつつ稲体の活力を維持するよう、以下の肥培管理を確実に実践する。

また、胴割粒や斑点米の多い農家や地域では、水管理、収穫、畦畔草刈り等の現状を見直し、点検を行う。

(1) 「未熟粒」を減らし、充実をよくする(過剰な籾数を防止し、登熟期の稲体の活力を維持する)

① 土づくり・施肥

○土づくり肥料を施用する(土壌診断の実施)

○深く耕す(作土深15cm以上を目標)

○基肥、追肥は適正な量にする(地力の高い地域のコシヒカリでは減量する)

○生育状況に応じて穂肥を施用

(籾数過多、倒伏を防止するため、幼穂を確認の上、葉色および株張りに応じて穂肥を施用する。)

高温時における登熟期の栄養不足を回避するため、必要量をきっちり施用する)

② 植え付け

○遅植え(コシヒカリでは、5月上旬に田植えを行うと茎数過多・籾数過剰となりやすいので、5月中下旬植えを行う)

○細植え(1株あたり3～4本を目標)

○疎植(湖辺50～60株/坪、平坦部60～70株/坪が目安)

③ 水管理・防除

○早めの溝切りと中干し(目標穂数の8割となったら遅れず中干しを行う)

○出穂前後各3週間は常時湛水(水を切らさない)

○発生予察に基づく防除(いもち病、紋枯病)

(2) 「胴割粒」を減らす

○収穫5日前までは落水しない

○適期収穫(刈り遅れない)

○適正な乾燥(高水分籾を急激に乾燥しない)

(3) 「カメムシ類による斑点米」を減らす

○畦畔2回連続草刈り（出穂2～3週間前と出穂期の2回連続）

○品種別に適期に防除（特に中生品種で被害が多いところは注意）

2 環境こだわり農業の実践

化学合成農薬および化学肥料の削減、堆肥等有機質資材の適正使用、農業排水の適正管理等に努める。

(1) 土づくり

地域ぐるみで土づくりを行う体制づくりと併せて、堆肥の投入など有機質資源の有効利用を行う。

(2) 化学合成農薬の削減

農薬の使用に当たっては、「農作物病虫害雑草防除基準」に基づき、使用者、農作物、農産物、周辺環境に対する安全に配慮した適正な使用を確保する。また、耕種的防除法・物理的防除法を組み合わせた総合防除や農薬の効率的な使用をすすめ、農薬使用量の削減を図る。

(3) 化学肥料の削減

施肥田植機や緩効性肥料の利用等をすすめるとともに、有機質肥料の活用などにより化学肥料の使用量の削減とほ場からの肥料成分の流出防止を図る。

(4) 農業排水の適正管理

代かき前の入水を土が7～8割見える程度の量に控え、水田ハロー利用による浅水代かきを実践し、移植前の強制落水は絶対にしない。濁水流出を防止する観点から、地域および流域の水利用を考慮し、短期間で移植作業が終了するように努める。

稲わらは、畝立てを行わず平ずきによりすき込み、窒素肥沃度を維持し、栄養塩類の流出負荷を軽減する。さらに、湖南や湖東地域の平坦地等の稲わらの分解が比較的早い地域では、耕起時期を年内中のできるだけ遅い時期とする。

(5) 環境こだわり農産物の生産

農協や集落単位等による環境こだわり農産物の組織的な生産を推進し、より安全・安心の取組みに加え、品質の向上や均質化、販路に応じたロットの確保に取り組む。

(6) G A Pを活用した生産、品質管理

収量低下、品質劣化等を防止するため、種子は毎年を更新を基本とする。

生産段階における異品種混入（コンタミネーション）が流通上の課題となっていることから、収穫・乾燥・調製等の作業において、異品種や麦等の異物が混入しないよう機械や施設の清掃を徹底する。

上記の取組みを推進するため、農産物の安全性確保および環境保全、労働安全などに有効な手法であるG A P（農業生産工程管理）手法を活用し、近江米の品質向上、信頼向上、生産者の経営改善につなげる。